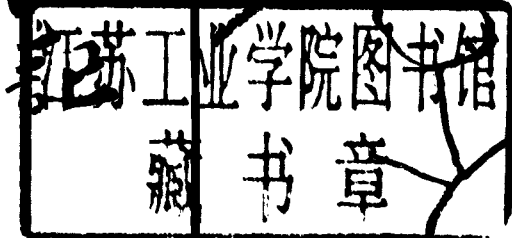


小島直記
伝記文学全集

任記文集全集

第十卷

島直



中央公論社

小島直記伝記文学全集

第十卷

定価 三四〇〇円

昭和六十二年七月十日印刷

昭和六十二年七月二十日発行

著 者 小島直記

発行者 嶋中鵬二

印刷者 小林 清

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二ノ八ノ七

振替 東京二一三四

©一九八七 検印廃止

ISBN4-12-402590-4

小島直記伝記文学全集 第十卷 目次

大過渡期——大正を動かした男たち

第一章 オールド日本の残滓

- 明治から大正へ 9 君側の奸山県有朋 18 桂太
郎のヨーロッパ旅行 26 明治日本のエリート 45
諒闇不況と師団増設問題 56 田中義一の登場 63
努力と俠気の人生 72 西園寺内閣の辞職と元老会
議 87

9

第二章 ペンと権力と

- 批判者中野正剛 94 「変節漢」徳富蘇峰 111 山路
愛山 130 桂と蘇峰の熱い関係 147 愚弟蘆花 156
講演「謀叛論」 177

94

第三章 政治不信の根

- 第一次護憲運動 188 桂内閣から山本内閣へ 203
松永安左エ門と中野正剛 214 第一次大戦による不
況脱出 238

188

第四章 財界の新しいリーダーたち

第三勢力和田豊治 256 製紙界の実力者藤原銀次郎 276

「日本工業倶楽部」誕生 291 新時代の到来 298

256

第五章 「成金」の時代と「貧乏」物語

「金持」と「成金」 308 船成金内田信也 315 久原

房之助の苦闘 327 「成金」ブームと貧富の格差 338

河上肇「貧乏物語」 350 北一輝の国家改造案 365

308

第六章 吉野作造と「新人会」

友愛会から日本労働総同盟へ 382 吉野作造 393

ヘーゲルにとりくむ 398 瀧田稔陰と『中央公論』 412

浪人会との対決 423 「新人会」結成 437

382

第七章 反体制のうねり

荒畑寒村と大杉栄 443 恋愛と二度目の出会い 457

アナとボルの別離 470 山川均と日本共産党の創立 486

443

第八章 昭和の「原型」

国際労働会議への代表者 505 財界人の政治志向 520

テロリズムの萌芽 533 山県と滔天必死の警告 541

軍人中心の時代へ 551

505

あ
と
が
き

小島直記伝記文学全集

第十卷

大過渡期

大
過
渡
期

——大正を動かした男たち

第一章 オールド日本の残滓

明治から大正へ

わが国には「年号」というものがある。年につける称号で、西暦六四五年、中大兄皇子なかのおおえのおうしや中臣鎌足なかつみが、蘇我入鹿そがはいかを宮中で暗殺し、軽皇子が即位（孝徳天皇）、中大兄皇子が皇太子として新政府を組織したとき、はじめて「大化たいか」という年号がつけられた。

これは中国の制度をマネしたもので、中国では漢王朝（前二〇二―後二二〇）の第七代皇帝である武帝（前一二―前八七）のとき「建元」と号したのがはじめだという。

年号は、第一に新しい天皇の即位によって変えられた。

つぎに、瑞祥ずいしょう、めでたいことがあると改められた。元正天皇時代、いまの岐阜県に霊泉がわき出るといので、天皇みずから行幸し、

「美泉以って老を養うべし」

として「養老の滝」と命名し、年号も「養老」（七二七―七二四）と改めたのがこの例である。

また、天変地異などの災厄があると改められた。徳川一〇代将軍家治時代の明和九年（一七七二）、二月に江戸の大火があり、秋に風水害のため諸国凶作となったため、「明和九年」は「めいわくな年」ときらわれて「安永」と改められたのがこの例である。

ところが「明治」以後は一世一元と定められた。すなわち、天皇一代にただ一つの年号を用いて改めないこととなったのである。

明治四五年（一九一二）七月二〇日、宮内省が「天皇尿毒症でご重態」と発表すると、株価が大暴落し、翌二一日から平癒祈願の市民たちが、終日宮城前にあつまった。また、濠ばたの電車は、宮廷内にレールをはしる音がひびいてはいけないというので、三宅坂の交叉点軌道にボロがしかれ、電車は徐行しはじめた。

一方、天皇が世を去られた場合、当然「年号」が改められる。

「どんな年号になるか」

そのことをめぐって、各新聞社の特ダネ競争がはじまった。

このとき、新しい年号は「大正」だという大スクープをやったのが朝日記者の緒方竹虎。いうまでもなく、のちの政治家、自由党総裁となる人だが、まだそのときは満二四歳、白面の青年にすぎない。スクープの原因は、その誠実重厚な人柄を愛した枢密顧問官三浦梧棲が教えてくれたことであつた。かけひき、テクニクでなく、人間味の手柄であつた。

朝野をあげての祈りにもかかわらず、七月三〇日午前〇時四三分、明治天皇六〇年の英雄的生涯はおわつた。つづいて皇太子嘉仁親王が踐祚（せんそ）、いよいよ大正時代の幕あけである。

「慶応」という年号が「明治」と変つたとき、徳川幕府による武家政治はおわりをつけて天皇親政の古に復した。また「江戸」は「東京」とかわり、日本の首都となつた。

ところが、「明治」から「大正」への移行は、こういう体制的変動も、首都の変更ももたらさない。そのことは確かにそうであつたが、かといって「大正」時代は、決して「明治」そのままの延長ではなかつた。それは一体、どういうことであつたか？ 現代のわれわれに教えるものは

何であつたか？

一九二二年七月にはじまり、一九二六年一二月におわる大正時代。

それは、不況ではじまり、不況でおわる一四年半であつた。が、その内容は、決してそれだけで言いつくせるものではなかつた。

その意味は、一口に不況といっても、大正開幕のときのもと、大正終幕のときのものとは、性格がちがつていた、ということでもある。また、第一次世界大戦によるブームも介在していた、ということでもある。

しかし、単に景気変動論だけではいつくせないものが、大正時代にはあつたのだ。

大正元年の正月——といえば、暦の上ではまだ明治四五年だが、きたるべき次代について、きわめてするどい予感を「日記」に書きとめた人がいた。

それは東京朝日新聞社の校正係、月給二八円、夜勤手当一夜一円、二七歳（数え）の石川一——
といつてもピンとこない人びとは、彼の筆名「啄木」を書けば、ぐっと親密感をましてくださるであらう。

しかり、「情熱の詩人、石川啄木」である。

ところが、その詩人啄木も、校正係「石川一」となると、まことにうだつの上らぬ非エリート社員だつたのだ。

啄木は、一七歳のとき盛岡中学校を中途退学している。小学校代用教員もクビになっている。函館、札幌、小樽、釧路と転々し、朝日新聞編集長佐藤北江に、同郷の縁で、校正係として拾ってもらつたのが明治三二年二四歳のときである。

しかし彼は、新聞社内ではくすんでいた。その姿は、奇しくも、生まれ（明治一九年二月）も、入社年度（明治四二年）もおなじ中野正剛が、初任給六〇円のエリート社員であったのとまったく対照的であった。

その第一の原因は、この新聞社だけでなく、日本の社会全体が「学歴」で人間を差別待遇する不当な壁にある。

ともかく、下積みであった上に、啄木は借金で苦しみ、病気で苦しんでいた。大正元年の正月もおなじで、「新年らしい気持になるだけの気力さえない新年」（一日）と日記に書いている。

ちょうど大晦日から一月一日にかけて、東京の市電が全部ストップしていた。ストは三田車庫ではじまり、青山、新宿、本所とひろがり、新聞は「前代未聞の椿事」と書き立てた。

ストの原因は、前年八月東京市に買収された旧東京鉄道会社の清算で、従業員にはわずかの退職金しか出さず、大半を会社幹部がふところに入れたことへの不満である。

その新聞記事に関心をもった啄木は、

「明治四十五年がストライキの中に来たという事は、私の興味を惹かないわけにゆかなかった。何だかそれが、保守主義者の好かない事のほとんど日本に起ってくる前兆のようで、私の頭は久しぶりに一しきり急がしかった」

と一月二日の日記に書いたのである。

ストライキは、大晦日と正月一日の二日間でおわり、二日から電車は動き出す。

ところが、ストに対する新聞の態度はさまただ。啄木日記の一月三日には、

「万朝報によると、市民は皆交通の不便を忍んで、罷業者に同情している。それが徳富（蘇峰）の国民新聞では、市民が皆罷業者の暴状を憤慨している事になっている。小さい事ながら私は面

白いと思った。国民が団結すれば勝つという事、多数は力なりという事を知って来るのは、オオルドニッポンの眼からは無論危険極まる事に見えるに違いない」

とある。

ところが啄木は、四月一三日早朝危篤に陥り、午前九時半、父、妻節子、友人の若山牧水にみとられながら永眠した。享年二七歳。

かにかくに渋民村は恋しかり

おもひでの山

おもひでの川

ふるさとの訛なつかし

停車場の人ごみの中に

そを聴きにゆく

やまひある獣のごとき

わがこころ

ふるさとのこと聞けばおとなし

石をもて追はるごとく

ふるさとを出でしかなしみ

消ゆる時なし

やはらかに柳あをめる

北上の岸辺目に見ゆ

泣けとごとくに

歌集『一握の砂』のなかでこのようにうたい、なつかしかった故郷にも、ついに帰ることはなかった。ましてや、ストライキによって幕あけた年、そして日本が、やがてどのようになっていくのか、その多感な眼で確かめることはできなかったのである。

啄木の日記は、予感にしかすぎなかった。しかしそれが、次代の中核ともいべき一つの問題点をとらえていたことはまちがいない。

ただ彼が、既成のもの、不動のものとした「オールド・ニッポン」にも、じつは変化があったこと、その変化が「進歩」ではなく、「腐敗」であったこと、それもまた次代の特徴となるのである。

そのことを、端的に明治天皇の健康問題でとらえて見せたのが三宅雪嶺^{せつれい}である。

彼は金沢の人で、本名は雄二郎。故郷の白山にちなんで「雪嶺」と号した。万延元年（一八六〇）生まれであるから、啄木のいう「オールド・ニッポン」にふくまれるようだが、立場、思想の選択は年齢だけの問題ではない。彼の指摘の事実をあげる前に、そういう指摘をする雪嶺とは、一体どういう人であったかを見ようとおもう。それは結局、昭和今日の言論の多くが、理屈はならべるがいっこうに迫力がない、という状況に対比して、言論の迫力は何から生まれるか、とい